

「2024年国立台湾大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学農学部1年 遠藤 佐保

① 学習成果

今回の派遣に参加して一番変化したのは、英語学習への意欲だ。留学プログラムのサポートをしてくれていた国立台湾大学の学生は皆かなり流暢に英語を話していて、英語圏から来た留学生ともコミュニケーションが取れていた。日本の学生のなかで流暢に英語を話せる人は一握りなので、最初は彼ら彼女らも日本と同様特殊例なのかと思っていたが、聞いてみたところ、入学試験で英語のスピーキングがある関係で国立台湾大学の学生のほとんどは同じくらい英語が話せるとのことで、非常に驚いた。一方私はスピーキングをあまりしことがなかったこと、また間違いを恐れてしまったことで、あまり積極的にコミュニケーションに参加することができず、悔しかった。また、私のクラスのSA (student assistant) の一人が私と好きなものが一緒だったのだが、彼女の話に相槌を打つのが精一杯で、とてももどかしかった。やはり国際的な交流の場では英語が共通言語であり、英語を身につける必要があるということが身にしみた。また、偶然出会った台湾の人と中国語で話せたり、コンビニでもものを尋ねたりすることができるようになり、自身の中国語スキルの進歩を感じることができ、言語を身につける楽しさや達成感を知ったことで、中国語学習への意欲も一層高まった。

また、これからの留学に関して、今までは将来長期留学をしたいというぼんやりした願望があるだけだったが、留学をしたいという思いが大きくなったし、留学のために身に付けないといけないスキルなどが色々あることがわかったので、努力したいと思うようになった。

② 海外での経験

日本と食文化が大きく違い、驚いた。夜市や市場が街のいろいろなところにあったり、日本には無い食材や果物がたくさんあったり、肉鬆、油條、咸豆漿など、日本にもある食材だが調理法が違うものもあり、食文化の違いを体験するのが楽しかった。

③ プログラムの内容

プログラムは平日に行われた。土日祝は休みだったので、週末はいろいろなところに観光に行けた。平日は9時から12時まで中国語の授業があり、午後は文化体験やtutor station (SAと宿題をやったり、交流したりなど) が2時間から3時間ほどあったり、バスで台北近くの場所に行き文化体験をしたりした。中国語の授業は、京都大学の授業と比べて中国語を話す機会が圧倒的に多く、中国語を話すことに慣れることができたと思う。文化体験は台湾の客家文化体験や、芋圓 (タロ芋を用いたスイーツ) を作るという内容だった。

④ 進路への影響について

将来長期留学をしたいと思っているが、留学先として台湾が選択肢に入った。